カバーイラスト　杉田比呂美
カバーデザイン　東京創元社装幀室

響きと怒り 上・下

フォークナー著 平石貴樹 新納卓也訳 岩波書店 2007（岩波文庫）

私はどうして私なのか － 分析哲学による自我論入門

大庭健著 岩波書店 2009（岩波現代文庫）

松谷警部と目黒の雨

平石貴樹著　東京創元社　2013（創元推理文庫）

法学部教授　**上原　正博**

昨年はフォークナーの『サンクチュアリ』を紹介し、また、その前後に読むにはもってこいと思われる舞城王太郎の『煙か土か食い物』を紹介したのだけれど、いずれもこちらに感じられるような反応はなく、ま、しかたないよな、と独りぶつぶつとつぶやきながら、やはり反応がないかもしれない紹介文を今年も書いている（いや、書かされている）。

この人、なんでこんな感じで書いてるのかしらぁ、わっかんな～いと思った人は鋭い。というか、普通のいい人。コミュニケーションって通じるもの、通じなくてはならないものと考えているノーマルな人という感じだろうか。こんな人こそ、読んでぶっ飛ぶ作品が『響きと怒り』だろう。語ること、コミュニケーションをとることとはどういうことかをあらためて考えさせられてしまうような語りによる文学の傑作である。

それを読んで、混乱してきて、「私ってなに？」、「私の語る私は私であって、あなたではないのだけれど、やはり私が私と思えない」というようなかたちの心のゆらぎが生じたら、じっくり読むべきなのは、『私はどうして私なのか』とくるだろう。じっくりと著者の論理につき従いつつ、考えるとはこういうことかと合点がゆく。そしてまた、私とは何かという心のゆらめきに安定をもたらしてくれることだろう。

「私」の分析に一字一句つきあい、考えることがどういうことなのかシナプスに十分にしみこませた読者諸氏が次に繙（ひもと）くべきなのは、本格的ミステリー『松谷警部と目黒の雨』となる。推理と論理はどのようなものなのか、考えることとなれば、次にはエドガー・アラン・ポーにもゆきつくことになるし、ボードレールやヴァレリーなどの詩人たちにもつながっていくはずだ。そう、ぼくらはすでにつながっている。